ある一家族・・・さ らに 4 人増えて

ロサ・シリャンとが、後アルベインとが、後アルインとが、後、世界のとのでは、1270のでは

2006/09/11

当時、家族は度々引っ越した。6番目の娘が生まれた時にウェルバに移った。「そこで私は少し自由した。「そこで私は少し自した。」であることで気がつきまけてることですが、子供を持てることですが、子供を持てるようになりまして、公話を持てるようになりました。」では、公前に入学しまりを、「大会社の事門学校に入学しました。」

入学については面白い話がありま す。」と、ロサは振り返る。「息子 の一人と賭けをすることになりまし た。ある日、彼が私に、自分は勉強 に向いていないと言ったのです。私 は彼を元気付けるために、「お母さ んですら自分の勉強をすることがで きる」と言いました。私達は賭けを しました。そして、私は学校に入学 したのです。第一学年をパスし、1 1番目の子が生まれた時、勉強を終 えました。生活が煩雑になると、ど こまでできるのか分かり、時間を活 用することを学ぶのです。

「ウェルバには、音楽学校がなく、 教師が求められていた。ロサは、青 年達に音楽を愛する心を育てたいと 願っていたので、学校設立に向けて グループを立ち上げた。まるで冗談 のように始まったことだが、音楽学 校を設立するに至った。「10人の生 徒で開校しました。ピアノは祖母の ものです。そして、今や600人の 生徒がいます。さらに、地方にも数校を開校しました。私はこの音楽学校の校長として10年になります。」

ロサがオプス・デイへの道を見出し たのは、そのアンダルシアの町で だった。「12人目の娘を妊娠中に スーパーヌメラリーとして、オプ ス・デイに所属することを希望しま した。若い頃から、オプス・デイに ついての話は聞いていました。| 彼 女の生き方がどんな点で変わったか と尋ねると、彼女は答えた。「私は 以前と同じことをしていますが、よ り平和な心で過ごしています。とり わけ、私は神の子であり、私の身に いかなることが起こっても、神から 私を遠ざけるものは何もないと確信 している心の安らぎです。オプス・ デイへの所属が、私のキリスト者と しての生き方に、何の特別な変化を 与えて来なかったと言うことはでき ません。それは、洗礼による神との

契約の意義と恩寵を深く認識させて くれる道なのです。」

それは、たとえ経済的に困窮してい ようとも変わることはない。ロサは きっぱりと言う。「お金がない時は余 計なことを心配しないで、本質的に 重要なこと、つまり子供達にきちん とした身なりをさせること、良い教 育を受けさせることに心を配ること です。私達は子供達を私立の学校に 入れることはできませんでしたが、 子供達の形成に良い影響を与えるた め、APA に加入するよう配慮しまし た。一方、私達家族の何がそうさせ るのか分かりませんが、子供達の友 達がたくさん集まってくるのです。 食べ物を用意するために、よくいろ んな野菜やわずかの残り物でも無駄 にせずにピューレにしました。我が 家のピューレは評判になりました。 さらに、我が家を訪れた子供達の関 心を引いたのは、皆一緒にテーブル に着いて夕食をとるということでし

た。私達は何も特別なことはしませんでしたが、とても楽しい時を過ご しました。」

年上の子供達が大学で学び始めた時、セビーリャに引っ越した。セビーリャで、ロサは、霊的な指導をオプス・デイ属人区に任せていたエントレオリーボス校で教職に就く機会を得た。それをきっかけに、娘達をその学校に入れることができた。その学校で退職するまでの15年間を過ごした。

インドから

ポルティーリャ家の決定的とも言える'気違い沙汰'は、ショッバ、ママタ、ユネシア、モニカを養女にしゃったことである。彼女達は、カトリック要理を勉強し洗礼を受けて、アンパロ、カルメン、ピラールという名前になり、家族に加わった4人のインド人の姉妹である。「当時は、私はは振り返って言う。「当時は、私は

もうこれ以上子供を持つことはでき ないと思いました。でも、まだまだ 母親として子供に注ぎたいたくさん の愛情を持っていました。私はアル ベルトと子供達に養子の計画を相談 しました。私達家族は皆、少々常軌 を挽しているので、全員、この計画 が気に入りました。とりわけ、末娘 のマリアは喜びました。養子の手続 きは困難で時間がかかりました。手 続きに入って2年が過ぎた時、2人 の女の子が候補に上がっていると連 絡がありました。しかし、私達が迎 えに行った時、たくさん子供がいる ことが分かり、後回しになりまし た。私達は本当にがっかりしてスペ インに戻り、養子の機会を失ったと 思いました。|

それから少しして、ロサ達は、娘を迎えにインドに行っていた ONG の会長と話をする機会を得た。数日して、彼は電話をかけてきて、彼の孤児院に誰も養女にすることを希望し

ていない 4 人の姉妹がいると伝えた。'家族会議'でこの件を検討した後、2 人受け入れるところが 4 人になっただけだと、結論を出した。

「この娘達は聖ホセマリアと聖母マ リア様からのプレゼントです。彼女 達は10月2日(オプス・デイの創 立記念日)にインドを出発し、私達 の守護聖人であるロザリオのマリア 様の祝日にセビーリャに到着したか らです。彼女達は私達に際限無く豊 かな寛容の内に生きる道を開いてく れました。とりわけ、子供達にとっ て、何にも増して大切なことを教え てくれたのです。世間は、彼女達は とても幸運だと言います。私は、幸 運なのは私達家族にとってだと言い ます。

アルベルトと口サには15人の孫がいる。一人は一ヶ月前、天国に召された。今、さらに2人の孫が生まれるのを待っている。「私達は孫達に

未来の若者の姿を見ています。彼らが再び、私達のこの家を笑い声で満たし、「おばあちゃん、お話してくれる?」とたずねるのを聞いて、とても幸せな気持ちで満たされます。 私達夫婦はおじいちゃんとおばあちゃんであることが、本当に大好きです。」

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/aru-jia-zu-sarani4ren-zeng-ete/(2025/12/17)